

イケメン教師の受難

伝説の水泳大会篇

第十二巻 極限の野外露出授業

海老沢 薫 著

内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 処刑台に立たされたイケメン教師

■ 海老沢薫 B L O G

■ 海老沢薫 W e b 連載小説

※ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ サイドストーリー 『イケメン教師の受
難 伝説の運動会篇』や、最新作の出版情報
そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「イケメン教師の受難 伝説の水泳大会篇
第十二巻 極限の野外露出授業」(以下本書
と表記する)の著作権は「海老沢薫」にあり
ます。

・ 本書のすべての内容は、日本の著作権法、
及び国際条約によって保護されています。

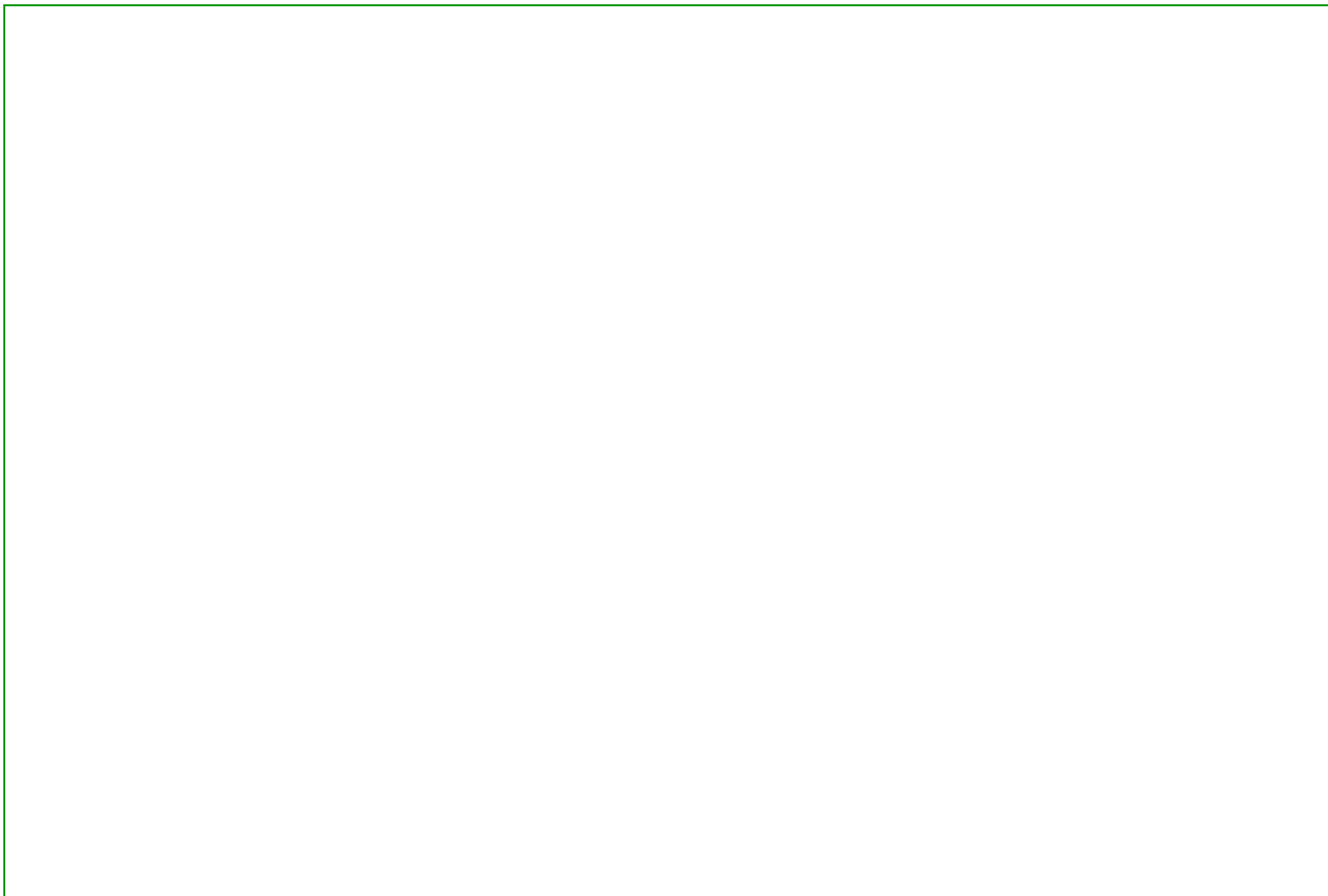
・ 「海老沢薫」が事前に書面をもって許可し
た場合を除き、本書の一部、または全部を、
あらゆるデータ蓄積手段(印刷物、電子ファ
イル、ビデオ、テープレコーダー)により複
製、流用、転載、転売することを固く禁じま
す。

・ 著作権の侵害につきましては、著作権法第
119条などの罰則がありますのでご注意くださ
い。

■ まえがき

校庭の隅にある鉄棒に一糸纏わぬ姿で緊縛
されているところを、体育の授業のために校
庭に現れた大勢の生徒や体育教師に見つかっ
てしまったイケメン教師の三神真琴。
そして、体育教師の邪な企みにより、あろ
うことかその逞しい裸身を性教育実習の教材
として差し出すことになった真琴は、生徒達
に強姦され校庭で幾度となく果てることにな
った。
やがて、新たな陵辱のアイデアを思いつい
た体育教師は、生徒達にイケメン教師の緊縛
された体を解くよう指示し、今度は校庭に置
かれた朝礼台の上に真琴を座らせる。
而して、射精の余韻から覚め、いつの間に
か朝礼台の上に座っていることに驚く真琴に
対し、体育教師は思わぬ命令を告げた。
「三神先生、特別授業の後半は先生自身にそ
の体を使って授業をしてもらうから、よろし
く頼むよ！」

真琴にはその言葉の意味がすぐには分からず戸惑っている、体育教師が耳元で何やら囁きかけ・・・。
体育教師から脅迫され屈辱的な命令を受けた真琴は、ギリギリした視線を向けてくる生徒達に向かって、卑猥なセリフを吐いていった。
「それではこれから、大人の男性の、オ、オニ―について、僕が実演しながら説明していきます・・・ああっ」
イケメン教師の口から飛び出した破廉恥極まりない言葉に生徒達は興奮し、朝礼台の上で仁王立ちになったイケメン教師に全員の視線が釘付けになった。
「それでは今からオニ―について実演しながら説明していきます」
真琴は改めてさつき体育教師から教えられた通りのセリフを吐くと、右手でイチモツを握りしめ、ゆっくりとそれを扱き始めたのだっ



■ 第一章 処刑台に立たされたイケメン教師

校庭の隅にある鉄棒に一糸纏わぬ姿で両手を緊縛されたイケメン教師の三神真琴は、恍惚とした表情を浮かべながら目を閉じ、グツタリと項垂れていた。その剥き出しのイチモツの先端からはポタポタと白濁の汁が滴り落ち、脚元の地面にはイチモツから放たれた大量のミルクが飛び散っていた。

昨日の放課後にこの場所に全裸で緊縛放置されてからすでに十五時間以上が経ち、その間に大量のミルクを搾り取られたイケメン教師はもはや心身共に疲れ切った様子で、体育教師が呼び掛けてもなかなか目を開けようとしないかった。

さすがのイケメン教師も、もうそろそろ限界なのかも知れない。・・。傍にいた体育教師や生徒達はそんな風に思い始めていた。しかし、体育教師はまだイケメン教師の陵辱シーン

を止めるつもりは毛頭なく、欲情を滾ら

せた生徒達もまだまだイケメン教師の陵辱シ
ョーを見たがった。
そうして、新しいアイデアを思いついた体
育教師は、近くににいる男子生徒達にイケメン
教師の鉄棒に緊縛された腕を解くよう指示し
た。
男子生徒達はまだ快感の余韻に浸っている
イケメン教師の両腕を解くと、体育教師の指
示で真琴の両肩を支えながらゆつくりと朝礼
台の方に向かった。
「それじゃあ、三神先生を朝礼台の上に座ら
せなさい！」
男子生徒達が朝礼台まで真琴を連れて来ると、
体育教師はそう指示した。
周りで見守る生徒達は、体育教師が一体こ
れから何を始めるつもりなのか全く分からな
かったが、きつとまた卑猥な陵辱ショーが見
られるに違いないと確信し、皆、興奮した様
子で朝礼台の上に座らされたイケメン教師を
見つめた。

それから暫くして、ようやく目を開けた真琴は鉄棒に緊縛されていたはずがなぜか朝礼台の上に座っていることに驚き、戸惑いの表情を浮かべた。

「三神先生、特別授業の後半は先生自身にその体を使って授業をしてもらうから、よろしく頼むよ！」

体育教師が真琴にそう呼び掛けると、それを聞いた生徒達はざわついた。

三神先生自身が自分の体を使って授業するその意味が生徒達にはすぐには理解できず、皆、それぞれの頭の途中で勝手な妄想を膨らませた。そして、当の真琴も体育教師の言葉の意味が理解できず、不安に表情を強張らせていた。

すると、体育教師は真琴に近づいて、その耳元でまた何やら囁きかけたのだった。

「そんなこと・・・」

体育教師の言葉を聞いた真琴は思わず驚きの声を漏らし、苦悶の表情を浮かべて首を何度

も横に振った。しかし、体育教師がさらに何か囁きかけると、真琴は抵抗するのを諦めた。かのうに大人しくなり、今度は絶望感に満ちた表情を浮かべた。

体育教師は一体何を伝えたのか・・・。真琴が激しく嫌がる姿を見た生徒達は気になつて仕方なかった。そして、もしかしたらさつきよりもっと恥ずかしいイケメン教師の姿を見られるのかも知れないと予感し、生徒達を意味深な笑みを浮かべながらイケメン教師の様子を見守った。

「みんな、それでは特別授業の後半について、これから三神先生から説明してもらおうから、しつかりと注目して聞くように！」

体育教師がそう呼び掛けると、体操着姿の生徒達は朝礼台の前に集まり、その上に座る素っ裸のイケメン教師に熱い視線を注いだ。

ああっ、恥ずかしい・・・。生徒達の注目を一身に浴びた真琴は、激しい羞恥に体の震えが止まらなかった。

「三神先生、早く生徒達に説明してやってくだ
さい！」
真琴が朝礼台の上に座ったまま黙って固まっ
ていると、見かねた体育教師がそう言っ
て促した。
「あぁっ、はい・・・」
真琴は仕方なく応じると、両手で股間を隠し
ながらゆっくりと朝礼台の上で立ち上がった。
「今から僕が、特別授業の後半を担当します」
真琴は恥ずかしそうに顔を真っ赤に染め、朝
礼台の下から見上げる生徒達に向かって告げ
た。
「それではこれから、大人の男性の、オ、オ
○ニーについて、僕が実演しながら説明して
いきます・・・あぁっ」
真琴はそう屈辱のセリフを吐くと、あまりの
恥ずかしさに喘いだ。
生徒達は、イケメン教師の口から飛び出し
た思いがけない発言に驚き、朝礼台の上で羞
恥に咽ぶ真琴にさらにギラギラした視線を向

けた。
「おいマジかよ、三神先生朝礼台の上でオ
ニ―するみたいだぜ―
「ウソだろ、教師が授業中にそんなことして
いいのかよ―
「でもなんだか面白そう、先生一体どんなオ
○ニ―するんだろ―
生徒達の間からそうした声が聞こえてくると
真琴は激しい羞恥に襲われ、朝礼台の上に立
つ脚がガクガク震えた。
体育教師は生徒達の後ろに立ち、朝礼台の
上に立つイケメン教師の姿を眺めていた。離
れた場所から見ると、処刑台の上に立たされ
たイケメン教師がこれから公開処刑を執行さ
れようとしているように映り、体育教師の加
虐心を煽った。
「ただ、オ○ニ―をする前に・・・僕の肛門
にずっと突き刺さっている・・・バイブを取
らせてください・・・」
真琴は恥ずかしさのあまり言葉が途切れ途切

れになりながら、そう告げた。
「うわっ、先生のケツの穴にバイブが入って
いるんだってよ！」
「それで、さっきからずっと悶えていたのか
」ケツの穴でも感じてたなんて、マジでド変
態教師だな」
生徒達はイケメン教師の尻の穴に何かが突き
刺さっている事は気づいていたが、わざと驚
いたフリをして、真琴の羞恥心を煽り立てた。
ああっ、恥ずかしい……。真琴は生徒か
ら浴びせられるヤジに心を痛めながら、左手
で股間を隠したまま、右手を尻の方に伸ばし
尻の穴に突き刺さったバイブを取り出した。
バイブはまだ振動し続けていて、ようやく尻
の穴を襲う快感から解放された真琴は少しホ
ッとした表情を浮かべた。
それから、真琴はバイブを朝礼台の上にそ
っと置くと、右手でイチモツを鷲掴みし、股
間を隠していた左手をゆっくりと体の横に垂
らした。これでイケメン教師の大きく膨らん

だイチモツが再び生徒達の前で丸出しとなり、
愈々始まるイケメン教師の野外オ○ニーシヨ
ーに生徒達は釘付けになった。
「それでは今からオ○ニーについて実演しな
がら説明していきますー」
真琴はそう告げると、右手でイチモツをゆっ
くりと扱き始めた。
「僕はいつもオ○ニーする時には・・・こう
やって右手で、オ○ン○ンを扱きますー」
イケメン教師がそう言っただけで露骨な表現を使っ
て説明すると、生徒達の興奮のボルテージは
さらに上がっていった。
真琴が今吐いているセリフは全部、さっき
体育教師から耳元で囁かれた言葉に他ならな
かった。体育教師は真琴を脅迫し、生徒達の
前で露骨な表現を使って説明しながらオ○ニ
ーして射精までするよう指示していたのだ。
そんな事情など何も知らない生徒達は、朝
礼台の上に素っ裸で立ちながらオ○ニーする
イケメン教師のことをどうしようもないド変

態教師だと思ひ込んでいた。
 「僕の・・オ・ン・ンが・・だんだん大
 きくなつてきているのが分かりますか？」
 真琴はまたしてもさつき体育教師から教えら
 れた屈辱のセリフを吐いた。
 「先生、オ・ン・ンする時は何を考えているん
 ですかあ？」
 突然、生徒の一人が質問を投げ掛けた。
 さすがに生徒のそうした質問に対する答え
 までは体育教師に教えられていなかったため
 真琴はもはやアドリブで答えるしかなかった
 「そ、それは・・」
 思いがけない生徒からの質問に何と答えれば
 良いのか、真琴にはすぐに分からず、思わず
 イチモツを扱く手を止めて考え込んだ。
 すると、それまで離れた場所から黙つて見
 ていた体育教師が大声で呼び掛けたのだつた。
 「三神先生は露出狂のド変態なんだから、全
 校生徒の前に裸で立っているところを想像し
 ているんだよね！」

体育教師の言葉はあまりに卑猥で辛辣なものであったが、生徒達の前で返答に困っていた真琴は、もはやその言葉に乗っかるしかなかった。
「そ、そうです・・・僕は、全校生徒の前に裸で立っている自分の姿を想像しながらよくオ○ニーしています・・」
真琴が朝礼台の上で羞恥に震えながらそう告げると、生徒達の間から失笑が湧き起こったのだった。

■ 海老沢薫 BLOG

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 連載小説『イケメン教師の受難伝説
の運動会篇』や最新作の出版情報、そのほか
各種コンテンツ情報などを配信。

■ 海老沢薫 Web 連載小説

『イケメン教師の受難 伝説の運動会篇』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=36195>

・ ・ ・ 二十五歳のイケメン教師、三神真琴はその端正なルックスと気さくで優しい人柄から勤務する高校で女子生徒達のアイドルの存在だった。

しかし一方で、そんなイケメン教師の事を良く思わない男子生徒達もおり、ある日の放課後、真琴は担任するクラスの生徒達の罾に嵌まり、教師生命を脅かすほどの弱みを握られてしまう。

その日から真琴は担任するクラスの生徒達に脅迫されるようになり、自身の教師人生を守るために彼らの奴隷として服従するようになる。

時に教師としてのプライドはおろか一人の男性としての尊厳までを奪われるような屈辱を味わい、どうしようもない自己嫌悪に陥る

こともあったが、それでも真琴は生徒の奴隷として日々懸命に戦っていた。

そうして、学園の一大イベントである運動会の季節が訪れ、真琴はそこでもクラスの生徒達に脅迫されてしまう。

運動会はイケメン教師の羞恥ショーと化し、真琴は全校生徒や同僚教師、観戦に訪れた大勢の父兄達が見つめる前で、途轍もない生き恥を晒すことになるのだった。

『イケメン春輝 二十歳の憂鬱』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764>

・ ・ ・ 大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステータジ上で罨に嵌められ大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。それでも見事ランプリを受賞した春輝はセレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。今年のグランプリ受賞者の春輝は、学園祭のステータジ上で前代未聞の痴態を披露した事からヌード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅された春輝は仕方なく撮影に応じることになった。

り・・・。
後日、早速授業中の大教室で撮影をするこ
とになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命
じられるまま服や下着を脱いでいき、糸纏
わぬ姿でポーズを披露する。
そうして撮影はだんだんエスカレートして
いき、イケメン学生は授業中の大教室だけで
なく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄
を味わうことになるのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 | 体を賭けた
屈辱の取引 | 大型ショッピングモール編』

https://regimag.jp/bo/book_view/?book=18357

・ ・ 吉川聖哉は、大学生時代に起業した二十五歳の若き事業家だった。頭脳明晰で抜群のルックスを持ち、社交的な聖哉はまさにイケメン社長と呼ぶにふさわしい華やかさを備えていた。

大学生の頃には、将来有望な若手イケメン社長として一部のメディアでも取り上げられるなど、他人が羨むほど順風満帆な人生を送っていた。

しかし、いつしか聖哉の会社の業績は低迷し、華やかだった生活は次第に陰りを見せていく。

自分に付いてきてくれる社員のため、そして自分の理想のために会社を立て直すべく日夜必死に働き続ける聖哉。

かつて将来有望な若手社長としてもてはやされていたイケメン社長は、どんな泥臭い仕

事でも引き受けるようになり、心ない取引先
やユーザー達からの羞恥の命令にも従い、人
生を翻弄されていくのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 ― 体で償う屈辱のクレーム ― 会議室篇』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=38623>

・ ・ ・ 25歳のイケメン社長、吉川聖哉は大学生時代に起業し、若くして成功したカリスマ社長であつた。

しかし、聖哉の会社は次第に業績が悪化し倒産の危機に瀕する状況まで追い込まれていった。

そのため、聖哉は会社存続のために新たに人材派遣事業を興し、様々な企業と取引を始める。

そんなある時、聖哉の元に大口の取引先から一本のクレームの電話が入つた。

取引先の相手は電話越しに聖哉を激しく罵倒し、今すぐ自社まで謝罪に来るよう命じた。

ただでさえ倒産の危機に直面している会社は、この大口の取引先を絶対に失うわけにはいかず、慌てて謝罪へと向かう社長の聖哉。

而して、取引先の会議室へ案内された聖哉

の元に担当部長と現場責任者、そして問題を
起こした当事者である聖哉の会社の社員が現
れ・・・。
平身低頭に謝罪する聖哉に対し、取引先の
相手は誠意ある謝罪を要求し、あまりにも屈
辱的な命令を突き付ける。
社長としてのプライドだけでなく、一人の
人間としての尊厳までも奪われるような命令
に聖哉は憤りを覚えずにはいられたかったが
自分の会社や社員を守り抜くために彼らの命
令に従う覚悟を決め、ついに底なしの羞恥地
獄へと堕ちていくのだった。